2020 年 6 月号　　題字　一萬田 尚登 第 5 代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 117 年）

上：社会的距離を保って閣僚会議をする
モディ首相　（中央）

下：オンラインで非同盟運動（NAM）サミット
に参加するモディ首相

（写真：インド首相府ホームページより）

目次

1. わが国のインド製造業経営幹部育成支援 ―プロジェクト関与体験談― …… P. 3
2. コロナ禍の中の宗教と医療 …… P. 10
3. インドニュース（2020 年 4 月-5 月）…… P. 13
4. 新刊書紹介 …… P. 21
5. 掲示板 …… P. 22

目次とページ数を合わせるため空白ページを入れております。

1. わが国のインド製造業経営幹部育成支援
―プロジェクト関与体験談―

Japan's Technical Assistance to India's "Visionary Leaders for Manufacturing Program" and My Engagement

筑波大学名誉教授　司馬正次

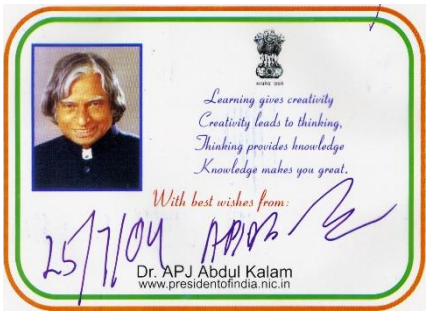
2018 年度末まで、私は、インド国製造業経営幹部育成支援プロジェクト（VLFM 〈Visionary Leaders for Manufacturing〉と以下略称）に私のすべての時間と能力を捧げた。私は来年米寿を迎える。その人生の中で、きわめて充実した時間と空間、また深い学びを得た 15 年であった。

私は、過去を振り返ることが嫌いだ。しかし、VLFM は、インドでの産業変革に日本が、国家プロジェクトとしてかかわった貴重な事例である。創始にかかわった者のオーラルヒストリーを残しておくことも必要と考えた。ゼロから新しい活動を立ち上げるときのノウハウが、そのなかにあるかもしれない。公的な報告書には記されていない VLFM 開始に至るいきさつを中心に、インド側の状況に絞り、私の経験を記してみたい。

1.　インド大統領からの偉大な恩寵（カラム大統領との運命的出会い）

2004 年 7 月 25 日は、私にとって忘れられない日である。デリーで初めての講演が終わり、ホッとしていた。突然、カラム大統領（当時）にお目にかかる機会ができたと、知らされた。半信半疑ながら大統領府に向かった。

いかめしい大統領府の建物と警護。石づくりの壁に囲まれた重々しい待合室。それとは全く対照的に明るい質素で何の飾りもない居室。大統領のお人柄そのままだ。付き添いとの 3 人だけ。



カラム大統領からの署名入りのカード

カラム大統領は、一枚の紙に三角形をお書きになった。底辺が異様に長い。上から横に 3 本の線。インドの企業は 3 つに分かれる。大統領、曰く。「1 段目は自分で技術、製品開発を行える企業でホンのわずかしかない。ほとんどの企業は、言われたままに何とかつくるだけ。それはこの三角形の底辺のように多い。この底辺をさらに第 2 段へ、さらに 2 段目の企業を第 1 段にあげていきたい。」

私は、感動した。このようにズバリと本質をシンプルに、視覚的に、しかも名もなき私に、上から目線ではなく真剣に問いかける。

答えた。「私には、底辺を上にあげることはできません。私は一人です。私にできることは、伸びる企業をさらに良くすること。日本が戦後発展した時、ソニーやホンダがありました。それに続けと多くの企業が頑張った。インド産業の発展を引っ張る機関車役の企業をつくること。それなら私にできます。企業変革を引っ張るリーダーづくりです。産業の発展はリーダーがつくります。」

このように、インドの製造業発展の方策について一時間近く、意見を述べるありがたい機会をえた。

パドマ・シュリー勲章の受章

このとき誰が思ったであろうか。8 年後にパテイル大統領（当時）から、再度大統領府に招かれることになろうとは。2012 年 3 月 22 日、大統領府の絢爛豪華な式典の間。全閣僚、与党党首など居並ぶ前で、パドマ・シュリー勲章を授与される光栄に浴した。

2.　プロジェクトは発見されるもの

私は、多くの国の産業発展プロジェクトにかかわってきた。1997 年にハンガリー全産業へ、また 1990 年からは米国マサチューセッツ工科大学（MIT）の傘のもと米国産業へ、その後フランス、スペイン、イタリア、中国

（上海）など、いずれも個別企業を超えた地域、産業、国の産業発展へアウトサイダーとしてかかわってきた。そのいずれでも、こちらから売り込んでプロジェクトが始まったケースはない。相手の国のキーパーソンに、私が発見され、コミットすることになった。インドの場合も同じであった。

2000 年のある日、インド工業連盟（CII）の幹部であったナグパル女史 が MIT の私の研究室へきた。「インドへ来て欲しい。米国であなたが始めているのと同様の産業発展活動をインドで行いたい。CII はインドの産業の発展に尽くす団体。歴史も実績も、全国組織もある。個別企業の利益のためにではなくインドのために」という。

私は、彼女の国を思う大義の心に打たれたが、断り続けた。

彼女一人では、インドでの新しい仕事は始まらないからである。プロジェクトを立ち上げるには二人がいる。一人はコネクター役、いま一人は実施・普及者の役割を担う人である。前者は、プロジェクトの意義と効用を現地の人々に理解させ、人々をプロジェクトに結びつけ、プロジェクトのシンボルとなる。そして後者の実施・普及者は、プロジェクトの推進展開役を担う人。ナグパル女史は実施・普及者には最適、だがコネクター役の人が必須と説いた。

コネクター役は 2003 年 11 月に突然現れ、私を発見してくれた。ソナ社の創業者 カプール氏である。同年、ソナ社は日本のデミング賞を受賞した。11 月の授賞式にカプール氏は日本に来た。たまたま、私は、海外受賞者のための特別セミナーの講演者であった。講演が終わった後、カプール氏は、私のところへ来た。

コネクター役（カプール氏）、実施・普及者役（ナグパル女史）がそろいまず第一歩へ

「ナグパル女史から、あなたのことはよく聞いていた。今日講演を聞いて、我が国の産業発展にあなたが必要と確信した。インドへぜひ来てほしい」と。私はカプール氏とその時初めて会ったが、運命のときが来たと確信した。

そして、最初の旗揚げ講習会が、2004 年 7 月に始まった。その時、冒頭でふれたカラム大統領にお目にかかる夢のような機会をえたのであった。私のコミットメントは、ゆるぎないものとなった。

このようにして、2004 年よりソナ社の創業者カプール氏がコネクター、そして CII の幹部であったナグパル女史を実施・普及者として、インド製造業の革新にむけたプロジェクトが発足した。その後、この活動が、国家プロジェクトとなるには、いま一人の発見者があった。

2005 年の半ば、私の滞在していたカプール邸に、一人の訪問者があった。インド政府、国家製造業競争力委員会（NMCC）の長、そして閣僚級の地位にあるクリシュナムルシー氏と紹介された。鮮やかな赤色の花が咲く、庭のパラソルの下でお目にかかったことが目に焼き付いている。

「あなたがインドで始めた活動の理念とその成果を話してほしい」と。前置きなしにズバリは、カラム大統領と同じ。志を同じくする、素晴らしいお方と直感した。

こうして、クリシュナムルシー氏に発見していただき、産官学協同によるインドの国家プロジェクトとしての VLFM 構想が生まれた。

この VLFM 構想が 2006 年 12 月に日印両首相の間で合意した「日印戦略的グローバル・パートナーシップ」のフラッグシップ・プログラムの一つとしてとりあげられ、インド政府から正式に日本政府へ実施支援要請書が提出された。この要請を受け、翌年から国際協力機構（JICA）の支援の下で「インド国製造業経営幹部育成支援プロジェクト」（2007 年～2013 年）及び「インド国包括的成長のための製造業経営幹部育成支援プロジェクト」（2013 年～2020 年）として、日印連携を象徴する国家プロジェクトへと発展していった。

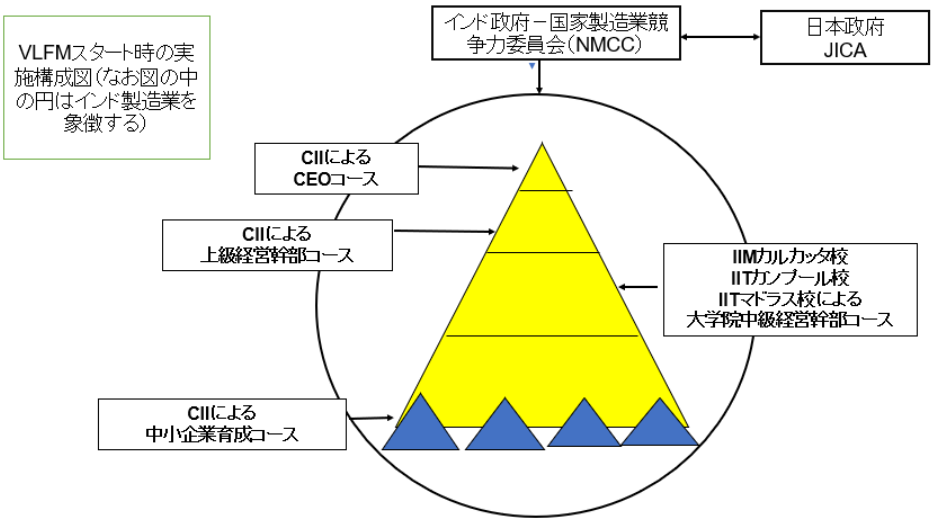
クリシュナムルシー氏の
リーダーシップのもと国家プロジェクトへ

3.　“筋の良い”ところで仕事をする

コネクターや実施・普及者が現地にいても、それだけでは活動を展開できない。現地での日常活動を支える組織、広い意味でのインフラが必要。その筋の良さ、組織の体質が、私の生きる目的と一致するか否か。一致しないところで働くのは私にとって地獄である。

生きる目的は人によって異なる。したがって、“筋が良い”の意味は、人によって変わる。　私にとってはただ一つ、ノーブルネスである。　私的利益や目先の利益を超えた、より高い産業、社会、人類への貢献、古い言葉で言えば産業報国である。これがないところでは仕事をしない、絶対妥協できない私の生きざまからきている。

幸いなことに、VLFM は、理想的とも言える筋の良い組織で始まった。CEO コース、上級経営幹部コースと中小企業育成コースは CII (Confederation of Indian Industry)により、また大学院ディプロマコースである大学院中級経営幹部コースはインド有数の大学（IIM カルカッタ校、IIT カンプール校、IIT マドラス校）の共同プログラムとして運営。さらにインド政府の NMCC（National Manufacturing Competitive Council）が全体の統括で出発した。そのいずれも、インド製造業発展のためという、ゆるぎないノーブルな目的を共有していたからだ。



4.　アウトサイダーの役割りと倫理

VLFM において、私はアウトサイダーに過ぎない。アウトサイダーの役割は 3 つある。

第 1 は、活動の明確な理念を持ち、それが自分の信念となっていること。さらにその理念を、誰にでも見える形で語る力が求められる。カラム大統領は、三角形をお書きになって、ビジュアルに自分の問題意識を示された。

VLFM の場合、私の理念は米国 MIT の“製造業のためのリーダーコース”である。1980 年代後半、米国製造業は競争力低下に悩んだ。それを挽回するべく、国家戦略として、競争力回復運動がおきた。MIT コースはその国家的課題に応えて発足した。

私は、発足直後の 1990 年に、コア科目のひとつ総合的品質経営を教えるべく招かれた。それ以来、教える科目はブレークスルーマネージメントに変わったが、2004 年まで、客員教授、併任教授としてかかわってきた。その内容を実体験として自分の信念として、カラム大統領、またクリシュナムルシー氏とお目にかかった時、伝えられたのではないかと思う。

MIT コースが狙う第 1 は、産業と大学のあいだの知の循環。そして、第 2 は工学と経営学との融合。技術変化の激しい時代。経営者には、工学の知識とセンスが不可欠だからである。そして第 3 がリーダー養成。ボトムアップではなく、時代の先を見たリーダーが国の発展をつくる。これらのいずれも、インドの中で生かされることになった。

その時歴史が動いた。２校の大学学長、一校の学長代理、CII 幹部の同志的結合ができた。

理念だけでは絵にかいた餅。それを現実化する具体案が必要。それへの参画がアウトサイダーの第 2 の役割である。

クリシュナムルシー氏のリーダーシップの下、まず産学合計4名からなるコアチームが作られた。そこに私も日本（JICA）の支援のもと参画した。企業トップへのインタビューや質問紙調査でインド産業の潜在的要望などを把握した。その分析をもとに、IIT カンプール校で産学のデザインワークショップを開き、調査結果と実施構想を報告した。

予想通り、懐疑的意見が、出席者の大半を占めた。最終日、3大学の学長などと CII の幹部が集まり、深夜まで話し合った。中止へと皆の心が揺れた。その時、「革新には反対がつきもの。インド製造業のために進もう」とある学長の力強い言葉。

これで VLFM は動くと思った。何故なら、実施現場のトップがその気になって初めて活動は動くからである。事実、この後大学と産業、それぞれのデザインチームによる実施計画へと進んでいった。決定はあくまでもその国の人。私は見守る人。だが大変嬉しかった。

アウトサイダーの役割第3は、汚れ役を進んで行うこと。変革のためには、今までの常識では不可能にチャレンジしなければならない。しかし、インド人同士では、それを言いだしにくい、また実行困難なこともある。

一つの実例がある。CII が運営する上級経営幹部コースは、参加者を個人募集ではなく、企業からの派遣者とした。派遣方式を成功させるためには、企業に守ってもらわねばならない事項が4点あった。しかし、インド側はそれを企業に言うのを逡巡していた。

その4点は、①オーナーや CEO が自分で参加者を選考し自分の口から本人に伝える、②成功事例の公開、③上級経営幹部二人の派遣、④5日 x 5回の日程で、もし欠席したらその日から即退学の原則であった。

私が直接出向き、オーナーや CEO と面談。4点の理解を求めた。

欠席即退学は非情であるが、これは教育方法から来る必須条件。なぜなら学ぶ内容は知識でなくスキル。それを一日ごとに積み上げていく。一日休むとついていけなくなり脱落するからである。この原則は、私がいる間、例外なしに貫いた。

いろいろ苦労はあった。しかし、上記4点“例外なし”の厳守により、学習内容が確実に定着し、短期間の間に成果が出た。そして、“より良い人を派遣すれば、それだけ企業に利益となる”、という言葉がオーナーたちの口から出るようになった。

アウトサイダーの役割は、あくまでもトリガーづくり。これが私の信念。内部からの変革は非常に難しい。その時、よそ者の持つハローエフェクト、つまり後光の力を借り、それに“もたれかかって”変革を進めるのが、ひとつの方法である。したがって、アウトサイダーは、自分の力でなくハローエフェクト（後光）のお陰と、自分の立場を自覚しなければならない。

ハローエフェクト（後光）が、私の後ろで輝いていたのは間違いない。あるインド人のコアチームメンバーが言った。「あなたがもし（某国）の人であったなら、絶対言うことを聞かなかった」と。日本の旗を背負って働くありがたさをつくづく感じた。

しかし、インドでは、“もたれかかる限界”を国民、中でもエリート層は強く意識している。これを教えてくれたのは、ゴビンダラジャン氏であった。

ゴビンダラジャン氏は、クリシュナムルシー氏の率いるインド製造業競争力委員会（NMCC）のナンバー2。メンバー・セクレタリーであり、インド人から良い意味で官僚のなかの官僚と、尊敬の目で見られていた人だ。

VLFM 初の全体会議のときのこと、彼が議長となり招集がかかった。私の派遣元の JICA は、招かれなかった。しかし、今後の緊密な日印協力のため、オブザーバーで参加してもらった方が、効率的と考えた。彼のオフィスへ行き、JICA のオブザーバー参加を頼み込んだ。

彼は穏やかに言った。　「VLFM の全体会議は、インド国内の大事な施策を決める場。インドのことはインド人で決める。インド人以外の参加は、オブザーバーでも認められない。日本との緊密な連携は別の会議で行う。なお、あなたは、日本政府に雇われていない。我々が頼んできてもらっている。だから、別である。」

私は、15年のインド滞在中、この時ほど，恥ずかしく思ったことはない。彼は国の威信を真剣に考えている。それに比べ、私は効率を考え、何が大事かを見失っていた。さらに、知らず知らずのうちに、援助している国との驕りが自分の中にあったことも教えられた。

しかし、彼は自分のメンツに、全くこだわらない人でもあった。教科書として使う私の本の出版記念会が、榎泰邦大使（当時）のお計らいで、在インド日本大使館で開催された。その時彼は、大使館へ出向き大事な役割を果たしてくれた。

これらの経験は、私のインド官僚への尊敬、さらにはインドへの尊敬を一層高めた。このレッスンを強く意識し始めてから、何か物事が、さらによく回り始めたことも確かだ。

5. VLFM の継続とそのアウトプット

VLFM は、今まで述べたいきさつでスタートした。それは現在も継続し、次の５つの成果を出している。

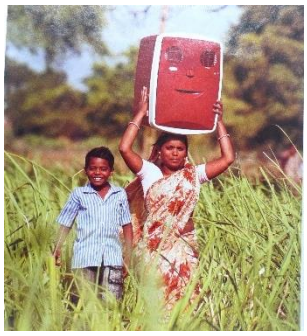
第１は卒業生である。インド製造業の変革を引っ張るリーダー役、上級経営幹部コース 767 名、若手の大学院中級経営幹部コース 458 名。さらに中小企業育成コースでは、工場ごとの幹部をチームとして、サプライチェーンを通じた情報と製造のフローの同期。それにより、品質・生産性向上と相互信頼関係をつくりだす。この活動に参加したのが 1,078 工場。（2019/2020 年度まで）

インド製造業を引っ張るリーダー達
（上級経営幹部）

いくつかの企業では VLFM 卒業生が、その企業のシニアー層の大半を占めている。あるオーナーは、VLFM がわが社の幹部を完全に作り変えてくれたと述べてくれた。また、大学院中級経営幹部コースからは、ユニークな創業者も生まれている。これらは人数という数字の背後にある成果といえる。

第２は、ビジネスへのインパクトである。質の高い成功事例こそが、あとまで、その個人、企業、産業に残るアセットである。

全卒業生による成功事例の中から特に優れた事例を出版し、インド産業にアセットが残るようにした。その総計は 43 冊に上る。そのうち、他の企業でも参考になるもの、さらにその革新の方法やプロセスの詳細分析など、大学の修士論文を超えるケーススタディーが 16 冊にのぼる。それらが、VLFM の教科書となり、ひいては Indian way of management の創造につながっている。特に、2018 年出版の４巻合計 481 ページに上る卒業生 56 名分の成功事例を紹介する総括集は、2007 年以来の成果をまとめたもので、成功事例の集大成といえる。



米国エデイソン賞に輝く
BOP 製品チョットクール
（簡易冷蔵庫）

また、世界から注目される事例も多く出た。例えば、エデイソン賞に輝いた BOP 製品チョットクール、サプライヤーから OEM の生産プロセス、さらに個別デイラーまでを直結したインドはもとより世界でも例が少ない一気通貫の「1 Sell-1 Make」生産システム（販売店に１製品が出荷されると同時にサプライチェーン全体で１製品を製造）など枚挙にいとまがない。

第３は、VLFM の自立、さらに VLFM の成果をインド社会に広げる意欲に満ちた次世代の創造である。先に述べた優秀な成功事例を創り上げた卒業生がその核となっている。 そして上級経営幹部コースでは、卒業生が自分たちで VLFM コースの計画、運営、変革を行っている。さらに、より広いインド産業へ VLFM コンセプトや手法を普及させるコンサルタント役にも踏み出しはじめている。

第４は、インドの伝統的縦割り組織を超えた異種結合組織の創造である。インド政府、IIT、IIM などの大学、そして産業、この産官学の連合プロジェクトはインドで最初であった。

コストシェア方式での日本訪問
（大学院中級経営幹部コース）

また大学でも、IIT カンプール校、マドラス校、IIM カルカッタ校との共同で大学院中級経営幹部コースを立ち上げた。経営と工科系の大学が共同して世界でも珍しい MOT コースを立ち上げたのである。しかも、計画から一年でそれを成し遂げた。インドはすごいと心の底から思った。

さらに中小企業育成コース卒業生のなかより、地方の草の根で、産学共同プロジェクトが生れた。地方のエンジニアリング・カレッジと、その地域に住む卒業生が共同で、VLCI（Visionary Learning for Community of India）という新しい学士・ディプロマ専攻コースを創り上げた。

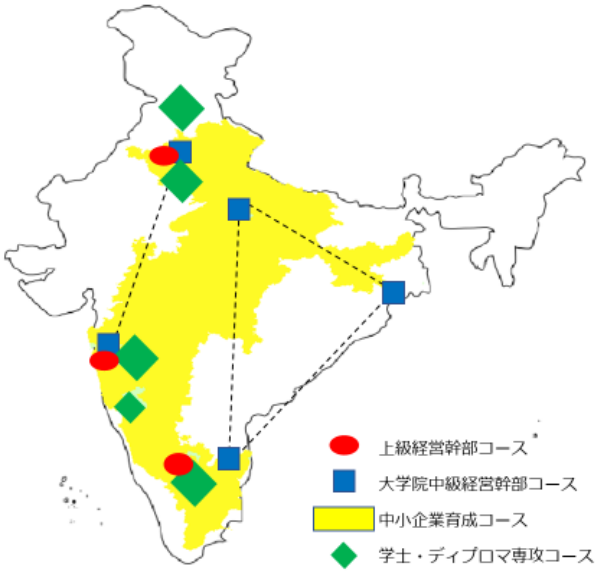
インドのいくつかの地域（マハラシュトラ州、カルナータカ州、タミルナードゥ州、ハリヤーナ州、ヒマーチャルプラデーシュ州）で拡大しつつある。このような縦割りを超えた、異種結合組織は、インド社会に、新しいインパクトを与えている。

第 5 は、日本との関係強化である。VLFM は、インドと日本との緊密な技術協力を創り出すのに貴重な役割を果たしたと、外務省、在インド日本大使館から評価をいただき、2011 年の野田首相の訪印の際のスピーチでは、過分にも言及いただいた。また同年、光栄にも学術交流功労のカテゴリーで私への叙勲、またインド側の本プロジェクト生みの母ともいえるナグパル女史には 2015 年に旭日小綬章の叙勲をいただいた。

特筆すべきは、上級経営幹部コース、大学院中級経営幹部コースの 1200 名を超える研修生の日本訪問である。7-11 日間にわたり、ソニー、トヨタの創業者精神、公害から環境都市へ転換した四日市での学習、さらには日本での異文化調査などにより、日本の理解を深めた。これらの訪問者は、インドのビジネスマン、しかも社会をリードする地位の人たちである。日本とインドとのビジネス、さらにより深い日印の関係つくりに貢献してくれるであろう。この貴重な人材が生かされることを心から期待したい。

なお VLFM 活動の、インドでの広がりの様子を示しておこう。このように VLFM はインドの主要産業地域を覆う活動として広がっている。

VLFM はインドの
主要産業地域を覆う活動



6. VLFM のスタートと継続は、インド社会の大きな手のひらと日本各界の支援のおかげ

今振り返ると、インド社会には学びの成果を自分だけにとどめないという Noble Mind がある。その大きな手の平の上で、私は走り回っていたのではないか。私を発見してくれたのも、大統領の恩寵も、コネクターや推進者が私をエキスパート役として扱ってくれたことなどなど、すべてがインド社会の偉大な手の平での出来事であったと感じている。15 年にわたる充実した”学びの旅”を与えてくれたことに感謝の言葉しかない。いや、この 15 年だけでなく、その旅の準備のため、55 年前に私の人生を変える学びを与えてくれた。1 年にわたるインド火力発電所での住み込み調査がそれであった。大きな神の手を感じている。

最後になったが、日本からの多くの支援に最大の謝意を表したい。

外務省、在インド日本大使館は、日印国家プロジェクト発足へ向けて、私の見えないところも含めて、多くのご支援をいただいた。それがなければ、プロジェクトは生まれなかった。その後も、大切な節目で日本国の立位置を的確に、かつシンボリックにインド社会に示してくださった。さらに、ありがたいことに歴代の大使の方々は、常にこのプロジェクトの現場の視察、また報告をお聞きくださり、身に余る激励、さらにご支援をいただいた。

もし JICA の継続した支援がなかったら、コストシェア方式とは言え 1200 名を超える研修生の日本訪問はなかった。数多くの成功事例の発掘、出版も出来なかった。出版がなければ、次の世代を引っ張る中核のリーダー

たちは生まれず、途中で息が絶えたであろう。JICA は組織を挙げて、VLFM の活動が円滑にすすむよう木目細かく、多くの知恵を絞り、ご支援をくださり、さらに今後も継続させようとしてくださっている。

私とともにこのプロジェクトのため、長期間、現地実務に献身してくださった古橋武之専門家、何代にもわたる業務調整員の方々、また厳しい条件の下、インドまで講義にお越しいただいた日本の経営者、学界、専門家の皆様へ感謝したい。一回当たり最大 70 名を超えるインド人研修生を日本の工場に受け入れ、モノづくりのノウハウを公開してくださった、多くの日本企業のご支援にお礼を申しあげたい。また日本の新聞、テレビ、雑誌などはこのプロジェクトを何回も取り上げてくださり、日本社会とのつなぎの役割をしてくださった。これらのオールジャパンのご支援があったからこそ、このプロジェクトを進めることができた。日本の国家プロジェクトとして理想的な姿をつくっていただいたこと、日本社会全体にお礼を申しあげる。個人的なことであるが、母親の最後の看取りなど、留守を預かってくれた妻美枝子の献身が、私の VLFM への関与を支えてくれた。

しば・しょうじ：筑波大学名誉教授、経済学博士。TQM 及びブレークスルーマネージメントの世界的権威。1990~2004 年、マサチューセッツ工科大学(MIT)スローン・スクール客員教授及び併任教授。2002 年、デミング賞本賞受賞。2004 年、ヨーロッパ品質管理界への貢献によりヨーロッパ品質管理機構よりジョージ・ボレルメダル受賞。2006 年、ハンガリー産業発展への長年の貢献により同国より大十字勲章受章。2011 年瑞宝中綬章受章。インドでは、2004 年よりインド産業(CII)と共に Learning Community の活動を実施。2007 年より、JICA の技術協力プロジェクト（VLFM/CSM プロジェクト）のチーフアドバイザーとして 2018 年度まで活動。インドにおける顕著な功績が認められ、2012 年パドマ・シュリー勲章受章。著書に「ブレークスルー・マネジメント」「A New American TQM」など多数。

入会随時受付中

日印協会は、1903 年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000 円)から	☆入会金	個人	2,000 円
	学生	１口(4,000 円)から		学生	1,000 円
	一般法人会員	１口(100,000 円)から		法人	5,000 円
	特別法人会員	１口(150,000 円)から		(一般法人、特別法人会員共に)	

2. コロナ禍の中の宗教と医療

Religion and Medicine in the wake of COVID-19 Disaster in India

ジャーナリスト　広瀬公巳 個人会員

日本を初めて訪れたインド人の菩提僊那（ボディセンナ）が開眼導師を務めたのが奈良の東大寺だ。当時日本では天然痘の大流行があり、仏教を深く信仰した聖武天皇は盧舎那仏を鋳造し厄災に荒れる国土を回復しようと祈願した。世界を未曽有の危機に追い込んでいる新型コロナウイルスも人々の心に中に大きな不安を作りだしており宗教が果たすべき役割は大きい。しかし人々との「接触」を必要とする宗教と、「非接触」を前提とする医療との両立が難しくなった。インドでの被害拡大の経緯を追うと宗教と医療の深い関係が浮かび上がってくる。

1.　グローバル化と感染症

東京メトロ日比谷線の広尾駅近くの祥雲寺には、大きな石碑『鼠塚』がある。明治33年（1900年）に東京でペストが流行した際、感染源として駆除されたネズミ達を慰霊するために建てられた。

「数知れぬ鼠もさぞやうかぶらむこの石塚の重き恵みに」

祥雲寺「鼠塚」　（広瀬撮影）

碑の背面に刻まれた歌から当時の混乱が読み取れる。ペスト流行地のインドから輸入された綿花に混入したネズミが有力な感染源とされている。ペストの流行は世界経済がグローバル化する黎明期に起きたもので、世界に大きな影響を広げ、インドでも労働力が不足し綿花産業が大きな打撃を受けた。物流の世界的広がりが感染地域を広げた形だ。

当時は世界の物流は船便が中心だったが、現在は世界に航空便のネットワークがはりめぐらされている。ペストの場合には、ネズミが処分されたわけだが、新型ウイルスは、ヒトからヒトに感染するものなので、そのような対応を採るわけにはいかず、人と人との接触を断つためには、社会的距離を取らざるを得ない。それは人口大国のインドでは至難の技であり、宗教大国でもあるインドでは困難を極めた。

2.　全土封鎖の中で拡大した感染

インドで初めて新型コロナウイルスの感染が確認されたのは1月30日。中国の武漢からインド南部のケララ州に帰国した学生だった。感染が広がらないようにインドはすぐに厳しい予防策を取った。入国管理局は2月27日、日本人に対し空港で発給していた入国査証を停止すると発表。3月2日にWHO（世界保健機関）が日本を「最も懸念される国」の一つに挙げ、その翌日にインド政府は発給済の入国査証を無効にするという異例の措置に踏み切った。横浜港に停泊していたクルーズ客船「ダイヤモンドプリンセス」でのインド人乗組員の感染がインド国内で大きく報道されていた。

初めての死者が明らかになったのは3月12日。サウジアラビアの子どもの家に1カ月ほど滞在していた76歳の男性が、南部カルナタカ州に帰国後一週間で呼吸困難に陥り数日で死亡した。モディ首相がテレビで演説し、3月25日からは3週間の全国的なロックダウンに入った。工場の稼働や建設現場の作業は停止し、鉄道やバスも多くが止まった。貧困層は収入も食料も失った。居場所を失った多数の出稼ぎ労働者が徒歩での帰郷を始めた。

外出禁止のルールを破った者は警官に見つかると警棒で叩かれ、二度と外出しないことを誓わされた。反省のため街中で腕立て伏せやスクワットをさせられた。警察官の中にはコロナウイルスの形を模したヘルメットを被るものも現れ、なりふり構わぬ姿勢で感染防止策を徹底した。

それでも感染の拡大は止まらず、感染者が5月はじめには5万人、死者が2000人に増えた。死者の数は、アメリカ、イタリア、スペイン、フランス、イギリスなどの欧米諸国比べると少ないが、13億の人口大国での感染爆発のリスクと影響は甚大だ。特に心配されたのが人口の密集した地域での感染爆発と治安の悪化。人口世界第6位の巨大都市ムンバイのスラム街のダラビ地区では、ロックダウンの延長が発表されると職を失った出稼ぎ労

働者がムンバイから脱出しようと駅に大勢押しよせた。ムンバイの人口密度は1平方キロメートルあたり2万人を上回る。東京都の3倍の密度で1人あたりにすると4.5平方メートルの生活空間しかない。三密を避けるのは難しい。

3. 感染拡大の場となった宗教

三密の危険が特に高まったのは宗教施設だった。大勢の人が一箇所に集まるヒンドゥー教の寺院やイスラム教の礼拝施設のモスクでは人との接触が避けられない。現地の報道などを見ていくと、厄災から逃れようする人々の信仰心と、互いに近づいてはいけないという医学上の知見との二律背反が様々な混乱を生み出していた。

全土を封鎖したモディ首相（公式ＨＰより）

まずは布教活動が問題となった。イタリアからインドに帰国したシク教徒の導師バルデブ・シンの新型コロナウイルスへの感染が判明した。シン導師は帰国後の隔離期間を置かずにインド北部のパンジャブ州の農村十数か所を巡って説教を行った。スーパースプレッダーになったとみられるシン導師自身は3月18日に死亡。シン導師との接触があった19人からの陽性反応が明らかになった。南部カルナタカ州では数百人がヒンドゥー寺院の祭に参加し群衆を作った。この地区は新型コロナウイルスの最初の犠牲者が出た場所で、感染ホットスポットとして警戒されていた。人々の不安が情報の混乱を生むことになった。

混乱に拍車をかけているのがインターネットのメディアだ。インド政府は3月20日、ソーシャルメディア事業者に偽情報の拡散を管理するよう指示を出した。遺体を火葬するとウイルスをまき散らすといったことや、航空機の乗務員が感染しているなど、不確かな情報や様々なデマが横行した。

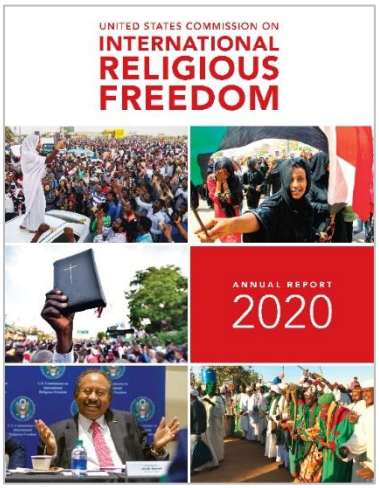
その一つが、肉食を批判する動きだった。与党インド人民党の政治家が肉などの食料の販売は菜食主義に反するもので規制をかけなければならないと主張した。牛の尿を飲む集会も開かれた。ニューデリーで3月14日、ヒンドゥー教の活動家数十人が、新型ウイルスから身を守るためとして、ヒンドゥー教で聖なる生き物とされる牛の尿を飲んで見せた。医療効果は不明だ。インドではコロナ禍の以前からも医薬品や日用品などに牛の尿由来の原料が使用されているものがある。一方でコルカタでは3月17日、同様の牛の尿を飲む集会で参加者に飲尿を強要したとしてインド人民党の党員が地元警察に逮捕された。参加者が体調を崩し警察に訴えたということだ。

4. 攻撃対象となったイスラム教徒と医療従事者

イスラム教徒への対応も難しい問題となった。発端はニューデリーで開かれたイスラム教団体の集会。参加者の間で新型コロナウイルスの感染が広がった。集会にはインドだけでなくイスラム教徒が多いインドネシア、マレーシアから数千人が参加していた。イスラム教の信者は狭い間隔で並び神に祈りをささげるため三密になりやすい。集団感染が各地に広がり不安が高まる中の出来事で過激なヒンドゥー教徒を中心にイスラム教徒を批判する声が強まった。ウイルスを利用して「コロナジハード（聖戦）」を仕掛けていると主張する者も現れた。インターネットが情報感染を拡大し、宗教対立が政治問題や国際問題に発展すると収拾がつかなくなってしまう。「世俗国家」インドの屋台骨を揺るがしかねない危険が生じた。

この時期、インドでは国内のイスラム教徒の問題が政治問題化しやすい状況だった。去年暮れ、インド政府はイスラム教徒以外の不法移民に国籍を与えることができる「国籍法改正案」を成立させた。この法律は救済対象からイスラム教徒を除外していたため、イスラム教徒を差別するものだとの批判が高まり、大規模なデモが全国規模で拡大した。イスラム教徒が多数を占めるカシミール地区でも長年にわたって守られてきた住民の自治権が剥奪され、モディ政権がヒンズー至上主義の色彩を強めているというイスラム教徒側の警戒感が強まっていた。インドでは過去にも大規模な宗教暴動が起きており、モディ首相自身、地方の政治家時代にその怖さを身をもって体験していた。

宗教の問題は国際関係にも波紋を広げた。アメリカの「国際信教の自由委員会（USCIRF）」が年次報告書で、宗教の自由についてインドを中国や北朝鮮などと同じ最低ランクの「特に懸念のある国」に位置づけた。4 月 28 日、インド外務省報道官はこれに強く反発した。イスラム教徒が多い中東でも、インド国内のイスラム教徒への同胞意識が強まるなど、新型コロナ禍を機に国際社会での協力と対立の双方の動きが広がった。



ＵＳＣＩＲＦ報告書　公式ＨＰより

UNICEF＝国連児童基金は 4 月 7 日、世界宗教者平和会議と共同で声明を発表し、宗教の違いを超えた協働を呼びかけた。4 月 11 日、国連のアントニオ・グテーレス事務総長は世界各地の宗教指導者たちに新型コロナウイルスとの戦いにおいて積極的な役割を果たすよう呼びかけた。

深刻になったのはイスラム教徒の問題だけではない。感染拡大対策の大きな障害となったのが、医療従事者が感染を拡大させるとの誤った認識だった。患者と接する機会が多い医療従事者が暴力や嫌がらせの対象になったのだ。医療関係者の中からも感染例の事例は報道されていたが、危険と隣合わせの状況でインド医療従事者は奮闘し被害の低減に努めていた。インド政府は、医療従事者への暴力などの不当な行為に最長 7 年の懲役刑を科す方針を決め、4 月 22 日に感染症法の改正案が成立した。ただ医療従事者にとって人々との「接触」は避けられないプロセスだ。アンベドカル大学の社会学者、プリヤシャ・カウル氏はカースト制の「浄」と「不浄」の概念に注目し、医療従事者は「新しいアンタッチャブル」と指摘している。宗教と医療はつながりが深いだけに問題の出口も見えにくい。

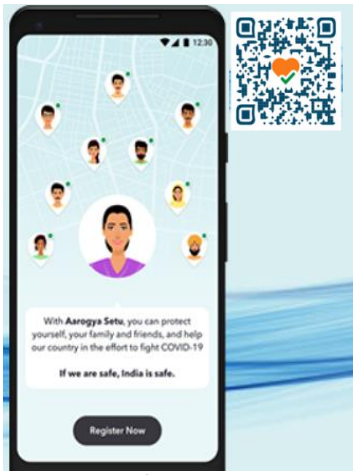
5.　宗教と医療を両立させるには

宗教が求める「接触」と医療が必要とする「非接触」。この二つに深く関係する場所がある。通称「死を待つ人々の家」。病人の最期を看取るため施設として 1952 年にマザー・テレサによりコルカタに設立された。病人が多いので感染のリスクはあるが、人道活動を行う施設なので患者と接触しないわけにはいかない。ここでは接触と非接触の微妙なバランスを取りながら施設が運営されてきた。宗教と医療は相反するものではなく、むしろ結びつきの強いものとなっている。マザー・テレサの人道活動には、ホスピス、HIV 患者のための家、ハンセン病者のための施設など、医療関係のものが多い。

ペスト、梅毒、スペイン風邪、HIV などの感染症は、世界史的にも人の接触の意識と深く結びついている。インドのコロナ禍は他者との距離の取り方を問い直す機会になっている。

今のインドでは「接触」と「非接触」のバランスをとる様々な知恵が注目される。

インド鉄道省は 3 月 28 日、隔離病棟不足に備えて、列車を臨時の隔離病棟に改造する計画を発表した。インドの農村部では鉄道車両が移動病院として利用されてきたため経験も豊富だ。南部ケララ州では湖に浮かぶハウスボートが患者の隔離病棟に変えられた。同じケララ州では地元警察が 3 月 17 日、マスク姿の警察官がダンスをしながら手洗いを啓発する動画を公開し手首や爪を正しく洗う方法を伝えている。医療先進州ケララならではの取り組みだ。



位置追跡アプリ　（公式ＨＰより）

インドの IT 大国ならではの取り組みもある。政府が推奨するアプリはスマホや携帯電話の位置情報を用いて感染者との接触履歴を追跡する。感染者と接触していたことがわかると通知が届く仕組みで、インドの IT 省が 4 月 2 日、無償配布を始めた。

もうひとつ、インドには接触を避ける方法として注目されているものがある。それは両手を胸の前であわせて行う「ナマステ」式の挨拶だ。ウイルス感染を防ぐために、挨拶のとき握手をすることができなくなった中国の武漢では握手の代わりに足を出して接触させる「武漢挨拶」が注目された。「ナマステ」挨拶はインド式の非接触挨拶だ。ハローでもコンニチワでもいいだろう。挨拶の言葉は各自の判断に任せればよい。自分の両手を合わせて相手との距離をとり、医療が求める「非接触」を保ちながら、心の「接触」を図れる。

菩提僊那ゆかりの東大寺では当面5月末まで、「三密」を避けるため本殿内に入らず大仏さまを中門付近から「遙拝」していただくことにしているという。インターネットで東大寺ミュージアムを動画で紹介し、大仏殿ではコロナ禍の終息、罹患された方々の快復などを祈って僧侶が読経を勤めているとのことだ。

5月末の段階で感染者数は15万人、死者も4000人に増えている。インドの人々の苦難に直接触れることはできないが、筆者も両手を合わせて事態の終息を祈りたい。（了）

ひろせ・ひろみ：大阪出身。南アジアを中心に30年間に約50か国の現場取材。モディ氏他インドの多数の要人と単独会見。NHKスペシャル「インドの衝撃」シリーズの制作統括。文藝春秋社「インドの衝撃」では解説を執筆。国際放送のインド特別番組「DYNAMIC　INDIA」のMCを行う。民族紛争を扱った「自爆攻撃　私を襲った32発の榴弾」（NHK出版）で第34回大宅賞最終候補。他、著書にインド洋大津波を取材した「海神襲来」（草思社）がある。2019年10月に文春新書「インドが変える世界地図　モディの衝撃」を上梓。南アジア学会、日本マス・コミュニケーション学会の会員。

広瀬さんのインドの情報サイト「インドの衝撃」をご紹介いたします。https://jibaku.info/

3. インドニュース(2020年4月-5月)
News from India

◇ インドニュース（2020年4月）◇

1　内政

【連邦政府/連邦議会】

4月3日：モディ首相は，新型コロナウイルスについて国民に向けた約10分間のビデオメッセージを発表した。

4月14日：モディ首相は，国民に向けた演説において，5月3日までのロックダウン延長を発表した。

4月29日：ナイドゥ上院議長は，上院議会議員に対し，次期国会の開催時期については新型コロナウイルスによる状況を見て判断されると述べた。

【デリー（DL）準州】

4月27日：DL準州警察は，2月に発生したDL準州北東地域における暴動に関連があるとして，ジャミア・ミリア・イスラミア大学同窓会長を逮捕した。

【ジャンム・カシミール（JK）準州】

4月1日：内務省は，JK準州に対するインド連邦法の適用を促進するため，ジャンム・カシミール州当時の独自法の一部をインド連邦による指示（Jammu and Kashmir Reorganisation (Adaptation of State Laws) Order,2020）として施行した。

【マハーラーシュトラ（MH）州】

4月29日：タークレーMH州首相は，モディ首相との電話会談の中で，同州首相がMH州上院議会議員としてMH州知事より任命を受けるよう支援を求めた。（同州首相は，昨年11月28日の就任後6か月以内に議会議員資格を得る必要があり，3月に連邦上院議会選挙が予定されていたが，新型コロナウイルスの拡大を受け延期となった。）

【マディヤ・プラデシュ（MP）州】

4月11日：タンカ上院議員（コングレス党）は，3月23日に就任したMP州首相がいまだ州内閣を樹立していないことは違憲であるとして，大統領に大統領統治を要求した。

2　経済

4月18日：インド政府は，外国直接投資（FDI）政策の見直しを決定し，外国企業によるFDI投資の制限において，政府承認ルートでのみ認められる投資制限規定の対象国をバングラデシュ及びパキスタンから国境を接する国に拡大し，中国等を対象国に含める改正を行った。

3　外交

【印パ関係】

4 月 13 日：現地メディアは，12 日のカシミール北部のクプワラ地区におけるパキスタン軍による停戦合意違反の攻撃により，子供や女性を含む計 3 名の一般市民が死亡した旨報じた。

4 月 20 日：インド外務省は，イムラン・カーン・パキスタン首相によるインド政府の新型コロナウイルス対策に対する批判に関して，スリバスタバ・インド外務省報道官のコメントを発表した。

【印・バングラデシュ関係】

4 月 29 日：インド外務省は，モディ首相がシェイク・ハシナ・バングラデシュ首相と電話会談を実施した旨発表した。両首脳は，新型コロナウイルスのパンデミックに伴う地域情勢について議論し，影響を最小化するために両国で取られている措置について意見交換を行った。

【印・ネパール関係】

4 月 10 日：インド外務省は，モディ首相が KP オリ・ネパール首相と電話会談を実施した旨発表した。

【印・ブータン関係】

4 月 16 日：インド外務省は，モディ首相が，ロテイ･ツェリン･ブータン首相と電話会談を実施した旨発表した。両首脳は，新型コロナウイルスをめぐる地域情勢及び両国で取られている措置について議論した。

【印・モルディブ関係】

4 月 20 日：インド外務省は，モディ首相がソーリフ･モルディブ大統領と電話会談を実施した旨発表した。モディ首相は，インドから医療対策チームがモルディブに派遣され，インド政府から提供された医療品がモルディブでの感染拡大抑制に寄与していることを喜んだ。

4 月 28 日：現地メディアは，新型コロナウイルスによるモルディブ経済・財政への影響を最小化し，安定化支援するため，インド政府がモルディブ中央銀行に対し，1 億 5000 万ドルの通貨スワップを提供する旨報じた。

【印中関係】

4 月 1 日：インド外務省は，同日，中印の大統領，首相及び外相との間で，インドと中国の外交関係樹立 70 周年における祝辞の交換が行われた旨発表した。

4 月 9 日：現地メディアは，インド政府が，拡大する新型コロナウイルスの脅威を受け，中国と必要な医薬品の供給に向け交渉している旨報じた。

4 月 20 日：現地メディアは，アルナチャル･プラデシュ州の Daporijo にある Subansiri 川に新たな橋が建設された旨報じた。中国との国境近くに位置する同橋が完成したことで，軍隊の円滑な移動，地域住民への食料配給等が容易となる。

【印・韓国関係】

4 月 9 日：インド外務省は，モディ首相が文在寅・韓国大統領と電話会談を実施した旨発表した。

【印・シンガポール関係】

4 月 24 日：インド外務省は，モディ首相がリー・シェンロン・シンガポール首相と電話会談を実施した旨発表した。

【印・ベトナム関係】

4 月 13 日：インド外務省は，モディ首相がグエン･スアン･フック越首相と電話会談を実施した旨発表した。

【印・インドネシア関係】

4 月 28 日：インド外務省は，モディ首相がジョコ・ウィドド・インドネシア大統領と電話会談を実施した旨発表した。

【印・ミャンマー関係】

4 月 30 日：インド外務省は，モディ首相がアウン・サン・スー・チー・ミャンマー国家最高顧問と電話会談を実施した旨発表した。

【印・米関係】

4 月 9 日：現地メディアは，シュリングラ外務次官が，ステファン・E・ビーガン米国務副長官と電話会談を実施し，インド政府が方針を転換した抗マラリア薬ヒドロキシクロロキンの輸出について議論された旨報じた。

4 月 17 日：現地メディアは，米国政府が新型コロナウイルス対策支援として，インド政府に 590 万ドルの支援を実施する旨報じた。同支援は，治療，検査，感染調査等に利用される。

4 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，マイク・ポンペオ米国務長官と電話会談を実施した。
【印・カナダ関係】
4 月 29 日：インド外務省は，モディ首相がトルドー・カナダ首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印露関係】
4 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，ラブロフ露外相と電話会談を実施した。
【印・エジプト関係】
4 月 17 日：インド外務省は，モディ首相がアブドゥルファッターハ・エルシーシ･エジプト大統領と電話会談を実施した旨発表した。
【印・南アフリカ関係】
4 月 17 日：インド外務省は，モディ首相がシリル・ラマポーザ･南アフリカ大統領と電話会談を実施した旨発表した。
【印・サウジアラビア関係】
4 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，ファイサル・ビン・ファルハーン・アール・サウード・サウジアラビア外相と電話会談を実施した。
【印・オマーン関係】
4 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，ユーセフ・ビン・アラウィ・ビン・アブドッラー・オマーン外相と電話会談を実施した。
【印・クウェート関係】
4 月 11 日：インド外務省は，新型コロナウイルス対策支援として，緊急対策チームをクウェートに派遣した旨発表した。インド政府は，医者及び専門家からなる 15 名のチームを，新型コロナウイルスに立ち向かうクウェート政府を支援するために派遣した。
【印・アフガニスタン関係】
4 月 13 日：当地メディアは，新型コロナウイルスに立ち向かうアフガニスタンを支援するための抗マラリア薬ヒドロキシクロロキン等の物資を載せ，インド籍船舶がイランのチャバハール港に向け出発した旨報じた。
4 月 27 日：ジャイシャンカル外相は，ムハンマド・ハニーフ・アトマール・アフガニスタン外相と電話会談を実施した。
【印・パレスチナ関係】
4 月 14 日：インド外務省は，モディ首相がマフムード･アッバース･パレスチナ大統領と電話会談を実施した旨発表した。
4 月 24 日：ジャイシャンカル外相は，リアド・アル・マルキ・パレスチナ外相と電話会談を実施した。
【印・ヨルダン関係】
4 月 16 日：インド外務省は，モディ首相がアブドッラー2 世・イブン・アル・フセイン・ヨルダン国王と電話会談を実施した旨発表した。
【印・カタール関係】
4 月 24 日：ジャイシャンカル外相は，シェイク・ムハンマド・ビン・アブドルラフマン・アール・サーニ・カタール外相と電話会談を実施した。
【印・UAE 関係】
4 月 24 日：ジャイシャンカル外相は，アブダッラー・ビン・ザーイド・アール・ナヒヤーン UAE 外相と電話会談を実施した。
【印・ブラジル関係】
4 月 23 日：ジャイシャンカル外相は，エルネスト・エンリケ・フラガ・アラウージョ・ブラジル外相と電話会談を実施した。
【印・ペルー関係】
4 月 28 日：ジャイシャンカル外相は，ネストル・フランシスコ・ポポリシオ・バルダレス・ペルー外相と電話会談を実施した。
【印・ジャマイカ関係】
4 月 29 日：ジャイシャンカル外相は，カミーナ・ジョンソン＝スミス・ジャマイカ外相と電話会談を実施した。

【印・コロンビア関係】
4 月 29 日：ジャイシャンカル外相は，クラウディア・ブルム・デ・バルベリ・コロンビア外相と電話会談を実施した。
【印・パラグアイ関係】
4 月 30 日：ジャイシャンカル外相は，アントニオ・リバス・パラシオス・パラグアイ外相と電話会談を実施した。
【国連】
4 月 24 日：現地報道によれば，新型コロナウイルスとの闘いにおいて全ての国に必要不可欠な医療品・ワクチンに平等かつ公平なアクセス権を確保する旨の国連決議にインド政府も署名した旨報じた。
【SAARC】
4 月 23 日：インド外務省は，パキスタン政府が主催した新型コロナウイルスに関する SAARC 保健大臣テレビ会合にインド政府が参加した旨発表した。

4　日印関係

4 月 10 日：インド外務省は，モディ首相が安倍総理と電話会談を実施した旨発表した。

今月の注目点（その 1）：日印首脳電話会談（概要）
4 月 10 日，午後 2 時 15 分頃から約 35 分間，安倍晋三内閣総理大臣は，ナレンドラ・モディ・インド首相（H.E. Mr. Narendra Modi, Prime Minister of India）と電話会談を行ったところ，概要は以下のとおり。

1. モディ首相から，新型コロナウイルス感染症にかかるインドの取組につき説明があり，これに対し，安倍総理から，モディ首相が SAARC（南アジア地域協力連合）首脳テレビ会議を主催，緊急基金を設立するなど，南アジア地域でのリーダーシップをとられていることに敬意を表した。
2. 安倍総理大臣から，新型ウイルス感染症に関する日本での取組を説明するとともに，在留邦人の出国に関するインド政府の支援に謝意を表し，引き続いての協力を要請した。これに対し，モディ首相より，ダイヤモンド・プリンセス号のインド人乗客・乗員への日本政府の支援への感謝があり，今後ともインドの在留邦人に対する支援を続ける旨述べた。
3. 両首脳は，現在の世界的な感染拡大を収束させるために，さらに，新型コロナウイルスが収束した後の世界において日印関係を一層深化させていくため，今後とも日印間で緊密に連携・協力していくことで一致した。

［参考］SAARC（南アジア地域協力連合）
　南アジアにおける比較的緩やかな地域協力の枠組み。南アジア諸国民の福祉の増 進，経済社会開発及び文化面での協力，協調等の促進等を目的とする。インド，パ キスタン，バングラデシュ，スリランカ，ネパール，ブータン，モルディブ，アフ ガニスタンの 8 か国が加盟。

今月の注目点（その 2）：新型コロナウイルス関係（モディ首相によるスピーチ（4 月 3 日））
1. 今日はコロナパンデミックを受けた全土ロックダウンの 9 日目にあたる。この期間中に国民諸君が見せた規律と奉仕精神は前例を見ないものであり，規律と奉仕精神の真の意味を示すもの。
2. この状況に可能な限りうまく対処すべく，政府，行政及び国民全体が共に偉大な努力を尽くしてきた。3 月 22 日（注：一日間のロックダウンを初めて実施した日）にコロナウイルスと闘うために国民諸君が見せた感謝の姿勢は，今日全ての国々の手本となっている。多くの国がこの試みを模倣している。
3. この試練の時にあり，多くの国は外出禁止令を出す，鐘を鳴らす，拍手を送る，お皿を叩いて音を鳴らす等して，国民に集団としての強さを気付かせている。こうした試みは，コロナとの闘いにおいて国は団結することができるという考えを深めることにつながる。こうした国の集団精神は，ロックダウンの間にも表すことができる。
4. 友人諸君，本日，この国の何千万の人々が家に籠っている中，彼らは自然と自分たちに一体何ができるのかと疑問に思うだろう。彼らだけでこの大いなる闘いをどう乗り越えていくのかと不安に思う人もいるだろう。多くの人々はまた，あと何日間このように過ごさなければならないのだろうと不安に思っているだろう。
5. 友人諸君，今は確かにロックダウンの時であり，我々はそれぞれの家に閉じこもっているが，決して一人ではない。13 億人のインド人の集団的な強さは私たち一人一人と共にあり，それが我々一人一人の強さでもある。国

民諸君のために，折に触れてこの集団的強さの偉大さ，尊厳，神々しさを体験する必要がある。
6. 友人諸君，この国では市民は神の現れと見なされている。したがって，国がこのような大きな闘いにあるとき，我々は時々人の形として現れている集団的な強大な力を経験する必要がある。こうした経験は我々の士気を高め，指針と明瞭さを与え，共通の目的とそのためのエネルギーを与える。
7. 友人諸君，コロナパンデミックによってもたらされた暗闇の中で，我々は光と希望に向けて前進し続けていく必要がある。我々は最も影響を受けている貧しい兄弟姉妹たちを失望から希望に連れていくべく努力し続けなければいけない。我々は明るい確かさに向かって取り組むことで，危機によってもたらされる暗闇と不確かさを終わらせなければいけない。我々は，すべての方角に輝かしい栄光を広める音で，危機の深い暗闇に打ち勝たなければならない。
8. したがって，今度の日曜日の4月5日，我々は共に光の力をもたらすことにより，コロナ危機によってもたらされた暗闇に立ち向かわなければならない。4月5日，我々は13億人のインド人の偉大な力を目覚めさせなければならない。我々は13億人のインド人の超越した決意をさらなる高みに持っていなければならない。
9. 4月5日，日曜日に，夜9時から国民諸君の9分間をいただきたい。注意深く聞いてほしい。4月5日夜9時，家のすべての電気を消し，家のドアかバルコニーに立ち，キャンドルやディヤ（注：ヒンディー語で明かりの意），懐中電灯，携帯のライトを9分間つけてほしい。
10. あなた方が家の電気を全て消せば，我々一人一人がすべての方向にディヤを灯すことができる。我々は光の超人的な力を経験し，我々全員が共に闘っていることを強調するだろう。その明かりの中で，輝きの中で，光輝の中で，我々は一人ではないとの決意を新たなにしようではないか。13億人のインド人は共通の決意の下でコミットしているのである。
11. 友人諸君，これに関してもう一点願いを述べたい。このプログラムに参加する間，複数人で集まったりしてはならない。地元の道には出てはいけない。自身の家の玄関かバルコニーで実施してほしい。誰も社会隔離の「ラクシュマン・レーカー（注：ラクシュマンの線。ラーマーヤナ神話に出てくるラーマ神の妻シータを守るためにラクシュマンがシータの家の周囲に引いた線。）」の線を超えてはならない。社会隔離はどんな状況でも破られてはいけない。これだけがコロナの感染チェーンを破る唯一の解決策である。
12. したがって，4月5日の夜9時，一人で座り，「母なるインド（Maa Bharati）」に思いを馳せ，13億人のインド人の顔を思い描いてほしい。集団的決意，13億人のインド人の集団としての偉大な力を経験してほしい。この試みが我々に闘う強さと勝つ自信を与えてくれるだろう。
13.「Utsaho Balwaan Arya, Na Asti Utsaah Param Balam, Sah Utsahasaya Lokeshu, Na Kinchit Api Durlabham」と言われている。これは，この世界には我々の情熱と精神以上に偉大な力はないことを意味する。さあ，共にこのコロナウイルスに打ち勝ち，インドに勝利をもたらそう。

今月の注目点（その3）：新型コロナウイルス関係（モディ首相によるスピーチ（4月14日））

1. 世界的に拡大する新型コロナウイルスに対するインドの闘いは，力強く，そして確実に前に進んでいる。国民の努力，献身のため，インドにおける新型コロナウイルスの拡大，被害は抑制されている。全国民が耐えて，国を救っている。
2. 自分（モディ首相）は，国民が，食料，移動，家族と離ればなれになる等の困難に直面していることは認識している。しかし，国民は，国のために統制された兵のように義務を果たしている。これは，インド憲法が言うところの「我々，インド国民」の力である。
3. インド国内各地で様々な祭りの時期を迎えている。多くの州では，多様な祭りとともに新年も祝われている。このロックダウンの最中に，国民が規則に従い，家の中で祭りを祝う姿勢は，賞賛に値する。
4. 国民は，今日の世界中における新型コロナウイルスの拡大の状況についてはよく知っていると思う。国民は，インド政府による新型コロナウイルス感染抑止の方法を見てきた。インド国内における新型コロナウイルスの初めての症例が発生するかなり前から，インド政府は，新型コロナウイルス感染国からの旅行者に対する空港でのスクリーニングを開始した。新型コロナウイルスの患者数が100名に達する前から，外国からのすべての訪問者の14日間の隔離措置を義務化した。モール，クラブ，ジム等も多くの場所で閉鎖された。新型コロナウイルスの患者数が550名だけの時に，インドは21日間のロックダウンという大きな措置に踏み切った。インド政府は，問

題の深刻化を待っていなかった。むしろ，迅速な措置を取り，問題を未然に防いできた。
5. このような危機において，インドの状況を他国と比べることは正しくないが，世界の大国における新型コロナウイルスに関する統計を見れば，インドは非常によくマネージされた立場にあるといえる。1ヶ月前は，新型コロナウイルスの感染状況についていくつかの国はインドと同様の状況であった。しかし，今日は，これらの国における新型コロナウイルスの症例はインドの25，30倍に及ぶ。
6. 過去数日の経験から，我々（インド政府）が正しい道を選択してきたことは明白である。インドは，Social Distancing およびロックダウンにより大きな利益を享受してきた。経済的側面については，疑うことなく代価を支払っている。しかし，インド国民の命と比べた場合には，国民の命に勝るものはない。
7. 各州政府も，大きな責任とともに，新型コロナウイルスの闘いに取り組んでいる。各州政府とは，継続的に連携をとり，インドにおける新型コロナウイルス対策をどのように進めるべきか議論している。皆，ロックダウンが延長されるべきだと提案した。
8. これを受け，インド全土におけるロックダウンを5月3日まで延長することが決定された。
9. ホットスポットに最新の注意を払わねばならない。ホットスポットになりうるリスクのある場所についても厳しく監視する必要がある。新しいホットスポットの発生は，より大きな挑戦をもたらす。したがって，今後1週間にわたり新型コロナウイルス対策措置を厳格化する。
10. 4月20日までに，すべての都市，警察署，地区，州はロックダウンがどのように遂行されているか評価される。
11. ホットスポットにもならず，ホットスポットになる可能性も低い地域については，4月20日以降，必要な，選ばれた活動を開始することが許可される。しかし，この許可は条件付であり，外出は引き続き厳しく制限される。同許可は，ロックダウン規則違反が確認され，新型コロナウイルスの拡大のリスクがあると判断されれば直ちに取り消される。詳細なガイドラインは，インド政府から明日（15日）発表される。
12. インド政府は，医薬品，食料，その他必要物資を十分に確保し，サプライ・チェーンの制限も解除されている。健康インフラも急速に拡大している。1月に新型コロナウイルスの検査機関が1カ所のみであったが，現在は220以上の機関が稼働している。世界的には，1万人の患者に対して1500から1600床のベッドが必要とされるが，インドはすでに10万床のベッドを用意した。また，600以上の医療機関が新型コロナウイルスの治療にあたっている。
13. 最後に，国民に，7点お願いする。
①自宅にいる高齢者に対する特別なケア。
②ロックダウン，Social Distancing の完全な遵守。自家製マスクの利用。
③免疫力向上のため，AYUSH 省からのインストラクション遵守。
④Aarogya Setu Mobile App（感染者の発生状況等を知らせるためのアプリ・感染者のトレースにも利用される。）の携帯電話へのダウンロード。
⑤貧しい家庭への支援。
⑥各企業，産業の労働者への慈悲。職を失わせないように配慮。
⑦新型コロナウイルスと闘っている医者，看護師等への最大の敬意。

◇ インドニュース（2020年5月）◇

1　内政

【連邦政府/連邦議会】
5月7日：ナイドゥ上院議長及びビルラ下院議長は，新型コロナウイルスの拡大による現状に鑑み，両院議会事務局に対し，ビデオ会議での議会委員会実施の可能性を検討するよう指示した。
5月12日：モディ首相は，新型コロナウイルス拡大による経済低迷を受け，合計20兆ルピーの経済活性化パッケージの実施を発表した。
5月13日：シタラマン財務大臣は，経済活性化パッケージのうち主に中小零細企業などの支援に係る施策を発表した。
5月14日－17日：シタラマン財務大臣は，経済活性化パッケージとして，13日に引き続き，移民労働者及び農業従事者を含む貧困層の支援に係る施策，投資促進及び防衛装備の国産化推進などの各種施策を発表した。

5月27日：シャルマ議会常設委員会（内務）委員長は，メディアに対し，新型コロナウイルスに係る都市封鎖後初めて6月3日に委員会を開会すると述べた。
5月28日：第二次モディ政権発足1周年を迎えるにあたり，モディ首相は，国民向けのメッセージを現地新聞各紙に寄稿した。
【コングレス】
5月1日：スルジェワラ・コングレス・スポークスパーソンは，内務省が発表した再度のロックダウン延長指示に対し，モディ首相をはじめ誰一人として公式の演説などによる発表を行わなかったと中央政府を批判するとともに，延長の目的及び出口戦略，経済低迷対策につき発表するよう中央政府に要求した。
5月6日：コングレス党指導部は，コングレス政権州の州首相らと，新型コロナウイルスに係る情報共有のためテレビ会議を実施した。ソニア・ガンディー暫定総裁率いる会議参加者らは，中央政府によるロックダウン適用時期の基準が不明，中央政府は現場の状況を把握していないなどとして，中央政府に異議を唱えた。
5月26日：ラーフル・ガンディー・コングレス前総裁は，メディアに対し，新型コロナウイルスの陽性件数が指数関数的に増加しており，都市封鎖の目的は失敗した，州政府は中央政府からの支援を得られていないなどと述べた。

2　経済

【インド経済（新型コロナウイルスに伴う経済対策第2弾の公表）】
5月13日－17日：シタラマン財務大臣が新型コロナウイルス感染拡大防止のための全土ロックダウン延長に伴う経済的影響や今後の経済活動再開に向けた対策として経済対策第2弾を公表したところ，概要は以下の通り。

ポイント
(1) 今回の一連のパッケージの事業規模は，第2弾分のみでは11.0兆ルピー。更に，医療関係緊急措置（1500億ルピー），3月の経済対策第1弾（1.7兆ルピー，貧困層対策などの社会援護（Social Protection）セクター向け）及びＲＢＩ（中央銀行）による流動性供給プログラム（合計8．0兆ルピー）といった既に実施されている分を含めて，合計で20．97兆ルピー程度（ＧＤＰ比10%程度）。
(2) 経済対策第2弾は，①主に中小零細企業を中心とするビジネス向け対策，②主に出稼ぎ労働者や農民などインフォーマルセクターの貧困層及び住宅市場対策，③農業及び食品加工等の周辺分野向け対策，④8つの産業セクターにおける改革及び⑤社会セクター（雇用，医療及び教育等）における政府の改革及び州政府財政対策の5つに大別される。

3　外交

【印・タイ関係】
5月1日：インド外務省は，モディ首相がプラユット・ジャンオーチャー・タイ首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・ポルトガル関係】
5月5日：インド外務省は，モディ首相がアントニオ・ルイス・サントス・ダ・コスタ・ポルトガル首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・エチオピア関係】
5月6日：インド外務省は，モディ首相がアビィ・アハメド・アリ・エチオピア首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・EU関係】
5月7日：インド外務省は，モディ首相がドナルド・トゥスク欧州理事会議長と電話会談を実施した旨発表した。
【印・イタリア関係】
5月8日：インド外務省は，モディ首相がジュゼッペ・コンテ・伊首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印露関係】
5月9日：モディ首相は，露の戦勝75周年を祝うメッセージをツイートし，「戦勝75周年に当たる本日の厳粛な追悼において，インドは露とともに立つ。第二次世界大戦において多くのインド人兵士も犠牲となった。プーチン大統領と露国民に心からの挨拶を送る。」と述べた。

【印中関係】
5 月 10 日：現地メディアは，9 日にインド軍と中国軍がシッキム州北部の印中国境付近で対峙した旨報じた。本件は，シッキム州北部の Naku La 地区で発生した。インド人兵士 4 名及び中国軍兵士 7 名が負傷したとされ，両軍計約 150 名を巻き込んだとされている。
5 月 14 日：インド外務省は，中国との実行管理ライン(LAC)付近における動きについて，スリバスタバ印外務省報道官コメントを発表した。同報道官は，「インド政府及び中国政府は，印中国境の全ての地域における平和と安定の維持を特に重要視している。モディ首相と習近平・中国国家主席は，武漢(2018 年)及びチェンナイ(2019 年)での非公式首脳会談において，両国が国境付近での平和と安定の確保のために努力し続けることを再確認した。これは，二国間関係発展全体にとって重要である。両首脳は，両軍に対して，相互・平等安全原則含めた両国で合意された様々な信頼構築策を真摯に実施すること，国境付近での衝突を防ぐ為に既存の構造及び情報共有メカニズムを強化することを指示していた。その結果，印中国境地域は，非常に平和である。しかし，状況によって，LAC における配置の捉え方の差異により，LAC の共通の認識を持っていれば避けられたであろう状況が現場で生じたことがある。インド政府は，印中国境地域における平和と安定の維持にコミットし続ける。」と述べた。
【印米・豪・イスラエル・日・伯・韓関係】
5 月 11 日：ジャイシャンカル外相は，ポンペオ米国務長官，ペイン豪外相，リヴニ・イスラエル外相，茂木外務大臣，アラウージョ伯外相，康京和・韓国外相とテレビ会談を実施した。同会談では，新型コロナウイルス対策，世界保健マネジメント，経済回復，移動制限等について議論された。
【印・デンマーク関係】
5 月 14 日：インド外務省は，モディ首相がメッテ・フレデリクセン・デンマーク首相と電話会談を実施した旨発表した。
【RCEP】
5 月 17 日:現地メディアは,15 日にインドの RCEP 再加入に関する新たな提案への対応の期限を迎えたところ，インド外務省高官が新型コロナウイルス後の中国に関する世界的な懸念がインド政府の RCEP に対する反対を強くしたと述べた旨報じた。
【印豪関係】
5 月 21 日：現地メディアは，6 月 4 日に印豪首脳テレビ会談が実施される予定である旨報じた。同会談は，新型コロナウイルス拡大後，モディ首相にとって初めての二国間テレビ首脳会談となる。
【印・パキスタン関係】
5 月 22 日：モディ首相は，パキスタンのカラチ近郊で発生した飛行機事故に対する追悼のメッセージをツイートし，「パキスタンにおける飛行機事故による人命の損失に深く悲しんでいる。遺族の方々への哀悼の意を送るとともに，負傷者の早期回復を祈る。」と述べた。
【印・スリランカ関係】
5 月 23 日：インド外務省は，モディ首相がゴタバヤ・ラージャパクサ・スリランカ大統領と電話会談を実施した旨発表した。
5 月 27 日：インド外務省は，モディ首相がマヒンダ・ラージャパクサ・スリランカ首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・モーリシャス関係】
5 月 23 日：インド外務省は，モディ首相がプラヴィン・クマール・ジャグナット・モーリシャス首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・バングラデシュ関係】
5 月 25 日：インド外務省は，モディ首相がシェイク・ハシナ・バングラデシュ首相と電話会談を実施した旨発表した。
【印・UAE 関係】
5 月 25 日：インド外務省は，モディ首相がムハンマド・アブダビ皇太子と電話会談を実施した旨発表した。
【印・エジプト関係】
5 月 26 日：インド外務省は，モディ首相がアブドゥルファッターハ・エルシーシ・エジプト大統領と電話会談を実施した旨発表した。

4　日印関係

5 月 7 日：ジャイシャンカル外務大臣は，茂木外務大臣と電話会談を実施した。

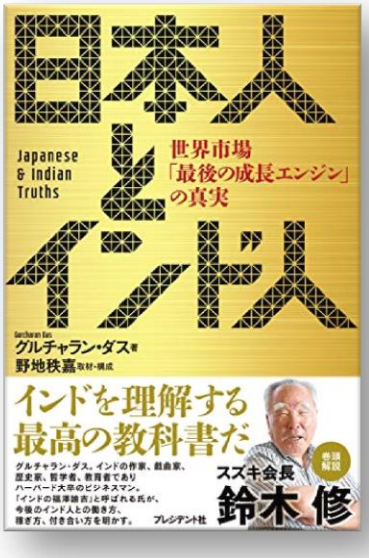
今月の注目点：日印外相電話会談

5 月 7 日，午後 3 時 30 分頃から約 30 分間，茂木敏充外務大臣は，ジャイシャンカル・インド外務大臣と電話会談を行ったところ，概要は以下のとおりです。

1. 茂木大臣から，新型コロナウイルス感染症が拡大する中，インドに滞在する在留邦人の帰国に関するインド政府の支援に謝意を表し，引き続き，邦人の安全確保への協力を依頼するとともに，インドにおける日本企業の活動の再開に向けた支援も要請しました。また，両大臣は，それぞれの国に滞在する自国民の帰国支援について一層協力することで一致しました。
2. また，茂木大臣から，新型コロナウイルス感染症に関する日本からインドへの協力について説明し，ジャイシャンカル大臣から謝意が表明されました。両大臣は，新型コロナ感染症対策に関する双方の国際協力につき意見交換を行い，引き続き両国で緊密に連携していくことを確認しました。
3. さらに，茂木大臣から，状況が落ち着き次第，再び二国間関係を力強く前進させたい，中でも，閣僚級「2+2」のフォローアップを始めとする安全保障・防衛面での協力や，経済・経済協力面での協力を進めたい旨述べました。これに対し，ジャイシャンカル大臣からも，今後も様々な分野で日印協力を進めていきたい旨述べ，両大臣は，「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」に基づく二国間関係を一層強化していくことで一致しました。

4. 新刊書紹介
Books Review

§『日本人とインド人 – 世界市場「最後の成長エンジン」の真実』
著者：グルチャラン・ダス（GURCHARAN・DAS）、野地秩嘉（取材・構成）
出版社：プレジデント社
価格：本体 1,600 円＋税　　ISBN978-4-8334-2363-2



「日本人ビジネスマンは、当初の想定から違った事態になると、『誰の責任だ！』とか騒ぎ始める。現状をどう解決するかといった改善策を考えるのではなく、自らの責任回避に走る。問題の指摘や羅列は得意だけれど、冷静に問題を解決することは苦手」、「意思決定が遅い」、「もっと冒険すべき」など、著者のグルチャラン・ダス氏は、日本人に対しなかなか厳しいコメントをしている。それが私に響くのは心当たりがあるからだ。

グルチャラン・ダス氏は、インドの作家、戯曲家、歴史家、哲学者、教育者であり、P&G の重要ポストを歴任したビジネスマンだ。「Times of India」にも定期的にコラムを執筆している。

本書の内容は、幅広い。インド人の精神性、日本人のインドでのビジネスの成功や失敗、カースト制度、インドの経済改革（デジタライゼーション）など。そして、分かりやすい。今のインドを知りたいと思っている人には「インドを理解する最高の教科書だ」。

日印協会の副会長でもある、鈴木修氏（スズキ会長）が帯にも写真があり、巻頭解説をしている。鈴木氏の解説はインドに対してとても温かい。グルチャラン・ダス氏の日本人や日本のビジネス進め方に対する厳しいアドバイスも、本を最後まで読むと暖かいと感じてくるから不思議だ。　　**（日印協会　山本真里枝）**

5. 掲示板
Notice

＜編集後記＞

緊急事態宣言解除とともに事務所の閉鎖も解きましたが、事態の収束までは必要最小限の縮小体制で運営しており、何かとご不便おかけします。

その中で今月は、NHK ニューデリー支局長や解説委員を歴任されたジャーナリストの広瀬公巳氏と、司馬正次筑波大名誉教授に寄稿をお願いしました。

広瀬さんには、NHK 時代に手掛けられた『インドの衝撃』も強烈な印象でしたが、今回も『コロナ禍のインド社会』をインドに根付いた視点で巧みに突き、あまり報道されていない事柄も、地元に張ったネットワークで見事にとらえ考察されました。秀逸でした。

他方司馬先生には、間もなく米寿を迎えられるとは思えないほどバイタルで、一気に原稿を書いてくださった。先生とは、抄子がインド在住の時から偶然にも出会いがありました。現役のタイヤ会社をリ・タイヤしたあと、縁あって米国企業の日系代表として駐在しておりました。ある時フランス貴族出のジョン・ド・モンロー社長から、ウチの社員が日本の指導で教育研修を終えたので、その成果発表と終了式典に参列してほしいとのこと。 その社長は、日本の製造業の強さを知ることができた大変すばらしいプログラムだと、興奮していたのを覚えています。

ホテルで行われたセレモニー会場に入った途端、なんとなく違和感のある雰囲気を感じました。なんとインド人研修生が、全員素早い動作と、椅子に背筋を伸ばして背もたれに触れることなく座り、誰も無駄話しをしていない。とかく、椅子に浅く腰掛けて足を組む、ペチャクチャしゃべる、というような振舞がないことに、大いに感動したものです。

その何か月かのち、司馬先生と機中でご一緒の機会があり、そのことを申し上げると、それはほんの表面的な一面で、本質的にもっと変わったところをぜひ見てほしいと言われました。その目で当該のインド人社員を観察しましたが、やや張り切り過ぎでしたが、順調に幹部候補として成長している姿を微笑ましく見守ったものです。

（編集人　日印協会事務局長 西本達生）

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド 2020年6月号（2020年6月19日発行）　　発行人 平林 博　　編集人 西本達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　　Fax: 03-5640-1576　　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/